

P. ゴルディのナラティヴ論

— *The Mess Inside*を読む —

村田憲郎

Narrative Theory of Peter Goldie

Reading *The Mess Inside*

MURATA Norio

Abstract

This note tries to understand Peter Goldie's theory of narrative developed in his work *The Mess Inside* (2012). According to this the narrative includes not only written or told one, but also what is thought through about oneself. In the first half part of this note I clarify his concept of narrative in terms of the role of emotional and evaluative perspective, then in the correlation of perspective and episode I deal with the topics of dramatic irony and free indirect style. In the second half in order to get more clear picture about Goldie's concept of "narrative sense of self" I pursue his criticism of Schechtman's theory of "empathic access".

はじめに

本論は、ピーター・ゴルディ Peter Goldie (1946-2011) の著作 *The Mess Inside* (2012) におけるナラティヴ論を紹介する。彼のナラティヴ論は、作品としての書かれた・語られた物語、あるいは公共的に語られた物語のみを扱うものではなく、より広く、自己について考えられたものの一般をナラティヴと呼んでおり、より原理的なレベルでナラティヴを捉えていると言える¹。この点で彼の議論は美学や芸術作品論・メディア論などでの物語論とは区別され、あるいは臨床的実践や社会調査などの手法に特化したものでもないが、逆にそれらの議論のための基礎を提供するような哲学的議論にもなっていると言える。また他方で、物語が人格的自己を構成すると考えるようないわゆる物語的自己の議論に対しても絶妙な距離をとっており、この哲学者の配慮に満ちた姿勢がうかがえる。

本論ではこの議論の中核をなすと思われる論点をいくつか紹介したい。本論は前半と後半に分かれる。まず前半では私が経験する過去ないし未来の出来事を捉えるのは単に認知的な作用では

1 ゴルディの業績全体については、論集 *Art, Mind, and Narrative*, Dodd, J.(ed.), の編者序文を参照。また日本での紹介は信原 (2017a, 2017b) による。

なく、情動的・評価的パースペクティヴである点を指摘し、次にこの視点と出来事の相関性の独特な捉え方として、劇的アイロニーと自由間接話法という事象について見る。後半では、彼のナラティヴ論の基本的姿勢をよく表す、ナラティヴ的自己感（観）についての議論を紹介する。そこでゴルディが取り上げたシェヒトマンの感情移入的アクセスという考え方を、次にゴルディのシェヒトマンへの批判を見ることによって、彼の言うナラティヴ的自己感（観）についてより明確な描像を得たい。

1. ゴルディのナラティヴ論の特色

通常ナラティヴとは物語といういみで語られるが、ゴルディはまず冒頭で、ナラティヴは実際に公共的に語られたもの・書かれたものである必要はなく、自己について考え抜かれた thought through² ものがすでにナラティヴであるという見解を述べている。この考え抜く think through ことはさまざまな仕方になされる。過去の出来事を思い出すこと、未来の出来事を想定すること、想像すること、また特に感情を抱かずに冷静に思い描くこと、逆に感情的に考えること、等々。彼によればこの thinking through は心に抱くこと conceiving³ と呼んでもよく、さらに後者は何かを心の中に取り入れる、心の中で形作る take into or form in the mind と同パラフレーズされる (P.4-5)。

この考え抜かれたものとしてのナラティヴは、単に出来事を羅列したものではなく、ある構造を持っている。

「一つのナラティヴは、形作られ、組織化され、色づけられた出来事の表象であり、ナラティヴはこれらの出来事やそこに関わっている出来事を、ある特定のあるいは複数のパースペクティヴから提示し、そのことによってナラティヴ的な構造——一貫性、有意味性、評価的・情動的重み——を、物語られるものに与える」(p.8)。

この、出来事が「形作られ、組織化され、色づけられ」、それらに「構造を与え」る過程を、ゴルディはリクールの用語を借りて「プロット化」⁴と呼んでいる (p.9, Ricœur 1984, p.31)。プロット化のプロセスについては、生の材料、プロセスそのもの、その所産、聞き手ないし読み手への可能的効果という四つの側面から論じうる。ここでそのうち最初の二つに注目する。

まずプロット化のための生の材料は、必ずしもその呼び名が思わせるような、加工以前の純然たる素材ではなく、つまりあたかも自然科学的に客観的・非人称的に観察された出来事記述のようなものである必要はない。もしそのレベルを出発点として想定するとしたら、プロット化のプ

2 「考え抜く」という訳語はあまりしっくりくるとは言えず、暫定的なものだと考えてほしい。

3 もちろん conceive は概念 concept の姉妹語であるが、ここでの conceiving には概念把握するという含意はないとゴルディはコメントしており、ナラティヴが非概念的内容をもつことすらあることをほのめかしている (p.5n)。

4 プロット化 emplotment という訳は英語版のもので、仏語原文では mise en intrigue、邦訳では「筋立て」。ゴルディも指摘するように、この語はリクールがアリストテレスの詩学における mythos の訳語として採用したものである。

ロセスそのものに過大な要求を課することになる。むしろ人々の思いや感情、気分などについての豊かな記述、さらには制度や文化、習慣などを含んだ、人類学者のギアツの言うような「厚い記述」(Geertz, p.3ff) でありうる、とゴルディは指摘する。あるいは有名なアンスコム⁵の例、ある男の行為を、腕を動かしている、ポンプを操作している、水を流している、住人に向けて毒を流し込んでいる、というぐあいに様々に記述が可能だという例 (Anscombe 1957, § 23) を想起してもよい。よりあとの記述はそのまえに記述された行為の目的ないし理由を説明しており、そのつどの機会に応じて適切な豊かさをもつ記述がある。そこで、どのような記述が適切かを決めるのが、プロット化のプロセスということになる (p.9-10)。

そこで第二にプロセスそのものについて言えば、そのプロセスはまず行為者性を含むとゴルディは指摘する (ibid.)。その加工の過程は人間の手によってなされたものであり、トマトが熟して赤くなるような自然界のプロセスではない。ただしここに、物語るというのはっきり自覚された意図が見て取れるわけではない。私が関与した出来事についての物語を形成するプロセスはまさしく手探り、試行錯誤 *tâtonnement* (p.11) であって、これは心的外傷など深刻な事例から、日常の些細だが印象的な出来事に意味を与える場合まで、振り返ってみればよく同意できることである。ここでの事情は、まず完成されたナラティヴがあり、次にそれに対して加工するプロセスとしての評価的・情動的反応があるというのではなく、むしろ前者はナラティヴに充満し、それを色づけ、ニュアンスづけている。そこから、一人称的パースペクティヴの重要性が浮き彫りになる。これをゴルディは感覚パースペクティヴ *sentience-perspective* と呼んでおり、この感覚パースペクティヴをもつことが、ネーゲルの言うような、それであるとはどういうことか *something that it is like to be that thing* といういみでの経験の主体であるということであるという。彼の言う行為者性とはむしろこのパースペクティヴと結びつけて考えるべきだろう⁵。

1.1. 情動的・評価的パースペクティヴ

さらにこの一人称的パースペクティヴについて重要なのが、このパースペクティヴの情動的・評価的な性格である。このことをプロット化の第三の側面であるその所産としてのナラティヴの構造についての議論に即して見てみよう。ゴルディによれば、この構造には三つの特性があり、それが上の引用中にもある、一貫性 *coherence*、有意味性 *meaningfulness*、そして評価的・情動的重み *evaluative and emotional import* である。第一の一貫性とは物語における出来事の連鎖を規定する出来事どうしの関係のあり方であり、物語においては因果的説明とよく似た関係が見られる (p.14)。ここでは第二の有意味性と、第三の評価的・情動的重みに注目しよう。

ナラティヴが有意味になるあり方には二通りのものがある (p.17)。第一には、思考や感情や行為がナラティヴに内的なそのときの登場人物に対してもつ有意味性がある。例えばある小説の中で語られる、主人公の家族の死は、小説の登場人物としての主人公にとって意味をもつ。第二に、ナラティヴはそれを物語るナレーターの外的なパースペクティヴを露わにすることによって意味をもつ。この場合彼ないし彼女の思考や感情が、ナラティヴがなにゆえそのような仕方です語られているかを規定する。

5 この議論は信原 (2017b)、p.224-9 をも参照。

内的有意義性について言えば、意味を与えるのは主にナラティヴ内の登場人物の心的状態であると思われるかもしれない。例えば、

「ジョーンズ夫人は初めてハーレー・ストリートのコンサルタントに会いに行った。彼の威張り散らす態度に彼女は恐れをなしたので、馬鹿なことや無知なことを言うことを恐れて、何も言わないでおくに越したことはない」と心を決めた」。

ここではナラティヴに内的なジョーンズ夫人自身の視点から、彼女の沈黙への意味づけがなされているが、コンサルタントの視点からの意味づけも可能である。

「コンサルタントに思い当たる理由は何もなかったが、ジョーンズ夫人は最初の会合のとき黙り込んでいた」。

しかし他方、彼女の沈黙の理由が明示的に述べられない以下のような場合もある。

「ジョーンズ夫人はコンサルタントとの初めての会合で、ずっと黙っていた。そのコンサルタントは威張り散らしていた。」

この場合でも、彼女はコンサルタントの態度に恐れをなしたので沈黙した、と言えるかもしれない。しかし彼女がその恐れをどれほど意識していたかは不明である。ゴルディは、登場人物の意識をふみこえるものが内的な有意義性を説明するケースがあることを示唆している。その例として行為の欲求的性格づけ、行為そのものが行為者の性格の表現になっているケース、心的要因でも心の内容になっていないもの（酩酊・不眠・鬱など）等々が挙げられる (p.19-22)。いずれにしても、有意義性が登場人物の意識に帰着しないからといって、ただちにナラティヴに外的なナレーター視点に帰着するわけではないことは注意すべきである。

次に、ゴルディが情動的・評価的重みと呼ぶものは、ある状況がある主体に対して、その主体の情動的・評価的な反応を左右するような仕方で現れるあり方である。内的有意義性と外的有意義性との区別に相関して、情動的・評価的重みの現れにも内的顕示と外的顕示 internal / external manifestation がある (p.23)。ジョーンズ夫人の沈黙というふるまいの内的有意義性は、彼女のコンサルタントに対する威張り屋という評価と、それへの彼女の恐れという情動的反応に結びついており、これが情動的・評価的重みの内的顕示である。

ここで威張り屋、威張り散らす domineering という評価語は、ウィリアムズの言う「厚い評価的概念」⁶であり、よい・悪いといった薄い評価的概念と対比され、厚い概念は薄い概念よりも記述的な内容を多く含んでいると言える。それら評価語はそれを評価する人物に直接的に帰されるが、事実と価値が分かち難く結びついているという印象は、こうした厚い概念の使用によって与えられると言える。

6 ウィリアムズを確認すると「厚い倫理的概念」となっている。Williams,2006=1993,p.155f=232f

このことを踏まえて、上の例で「威張り散らしていた」と評価するのが誰なのかをもう一度考えてみよう。それはジョーンズ夫人というナラティヴに内的な人物なのか、それとも外的なこのナラティヴを物語るナレーターなのだろうか、いずれかはっきりしないことがわかる。そもそもナレーターが、自分ではっきりそれとは自覚せずに「威張り散らした」と評価しているのかもしれない。あるいはナレーターはジョーンズ夫人がそう思っていることをほのめかしつつも明言を避けて、意図的に曖昧に語っているのかもしれない。しかし「威張り散らした」という評価語を使用しているのはナレーターなのだから、この評価に対するコミットが全くないわけではない。いずれにしてもこれは、理論上明確な外的／内的という区別が実際上は難しいケースがあることを示している。

1.2. 劇的アイロニーと自由間接話法

理論上は可能な、内的／外的パースペクティヴの区別は、実はすでによく知られた事象をよく説明してくれる。次にゴルディが「劇的アイロニー dramatic irony」(p.26) と呼ぶ事象を見てみよう。

例えば『オイディプス王』において、オイディプス王が父親殺しと母親との結婚という禁忌を犯しつつあることを観客はみな知っているが、舞台上のオイディプス王だけが知らない。また『ロミオとジュリエット』において、ロミオが自死する必要はないことを観客はみな知っているが、舞台上のロミオだけが知らない。このように悲劇の核心には、登場人物と観客との視点のギャップがあると言える。この事情をゴルディは劇的アイロニーと呼ぶ⁷。

通常アイロニーと呼ばれるものについて考えてみると、それは言語活動について言われるが、まず第一に字義通りの意味があり、第二にそれとは別の、話し手が表現に込めた意味があり、第三に、この二つが独立に、あるいは両者を対比させて、把握されなければならないという事情がある。同様に劇的アイロニーにおいては、第一にものごとが実際はどうであるかの把握、第二に他の人にはそれがどう思われているかの把握があり、第三に両者の対比を把握しなければならないという事情がある。ここには以上の3点において共通点があると言える。

ゴルディはここで発達心理学における「誤信念課題」という実験を引き合いに出す (p.28-9)。その実験では、被験者の幼児に人形劇を見せる。劇中で人形のマキシはチョコレートを入れた箱に入れて遊びに行ってしまう。マキシがいない間に、マキシの母親の人形がやってきて、チョコレートを戸棚に移して出て行く。その後マキシが帰ってくる。ここで、劇を見ている幼児に、マキシがチョコレートをどこに探すかを質問する。むろん正解は箱の中であるが、3歳ぐらいまでは戸棚と答えてしまい、正解できるのはだいたい4歳ぐらいからだと言われている。よく知られたこの実験は、劇的アイロニーの把握に関するものでもあることが気づかれよう。ここでゴルディは、こうした誤信念を帰属する能力のように、パースペクティヴの多様性を把握する能力は、ある年齢で一挙に獲得されるのではなく、段階的に獲得される、という心理学的知見を紹介している。例えば異なる欲求を帰属する能力は、異なる信念を帰属する能力よりも早く獲得され、さらに情動的な含意（例えば誤った信念をもつ登場人物の幻滅や悲しみなど）を自分の情動から区別

7 劇的アイロニーについては信原 (2017a)、p.226f をも参照。

できるようになるのはさらに後になってからだという。つまり、発生的にはパースペクティヴの多様は、もともと一体として把握していたものを、徐々に分節化させて捉えられるようになる能力によって説明される。そうすると、ここには、私たちが劇的アイロニーを把握する力を持ちながら、他方ではいまだ自分の境遇に無自覚な当の人物に思わず同情してしまうことの秘密が隠されているように思われるだろう。

このようなアイロニー的ギャップは、私たちが過去の出来事を想起する場合でも見られると言える。そこでのいまの私の視点と、そのときの私の視点のギャップは、原理的には劇的アイロニーにおけるナレーターないし観客の視点と登場人物の視点とのギャップと類比的である。しかしこのギャップが判明ではない場合も多い。ゴルディは例として、過去に経験したテニスのダブルスの一場面を、

「私とパートナーは同じロビングボールを追いかけていき、そこでひどく滑稽にもつれあって転んでしまった」。

と描写するケースを挙げている。このとき自分たちを「ひどく滑稽」であると描写するのはそのときの私か、それともいまの私か、判然としない。このような事例は、文学作品における人物やその他の描写にその豊富な例を見出すことができるので、ゴルディはそこでの用語を借りて、「自由間接話法 free indirect style」と呼んでいる。

ゴルディの印象深い事例をあげよう (p.38)。ある職場のパーティーで、私は酔ってかなりよい気分になり、テーブルの上に立って「Love is like a butterfly」を声を張り上げて歌った。周りの友人たちにも大受けし、私はすっかり悦に入っていた。しかし、数日たつていまの私はその話をするとき、それはアイロニーを込めて語られることになる。ここにはいくつかの性格をもつアイロニー的なギャップがある (p.38-9)。まず、そのときの友人たちは私とともに楽しんで笑っていたのではなく、私の常軌を逸した羽目の外し方を笑っていたのだと思うようになった。これはいまの私は知っているが、そのときの私は気づいていなかった、という認識的ギャップである。また、そのときの私の振る舞いが馬鹿げていて恥ずかしいものであったといまでは考えている。これは同じ私の振る舞いを、いまの私はそのときの私とは異なる仕方で考えているという、評価的ギャップである。最後に、私がしたことによりいまの私は羞恥心を覚えている。これはそのとき私がしたことに対して、いまの私が回顧的情動を覚えるという、情動的ギャップである。いまの私の視点とそのときの私の視点との間にあるこれらのギャップが、この事例ではきわめて明らかであると言える。

このようないまの私からの性格づけを当の出来事が受けるのは、それが物語られるときだけではなく、出来事として想起される時点ですでに当の性格を受けていることもある。上のエピソードを私自身が以下のように語る場合を考えよう (p.48)。

「私は昨晚、恥ずかしいことに自分からおどけてひどくばかげたことをしてしまった。テーブルの上に立ち上がって馬鹿馬鹿しい歌を大喜びで歌ったんだ」。

ここでの自由間接話法の働きは複雑である。まず私の昨晚のふるまいが恥ずかしく、馬鹿げたものであると性格づけるのは、いまの私の視点である。しかしそのときの私が自らすすんで行ったことも「大喜びで gleefully」という表現などからうかがえる。このように、自由間接話法によって、アイロニーのギャップが「開かれると同時に架橋される」(p.39)。そこではいまの私とそのときの私の視点はこのように融合して現れるのである。

ここでゴルディは以下のような反論を想定する。意味記憶ないし命題的記憶、つまり言語表現上で表現され理解される限りでの記憶に関してはそうかもしれない。しかしエピソード記憶、つまり記憶として保存されている特定の具体的な出来事については、私はそれを当時確かに体験したのであり、このエピソード記憶に対して、私のいまの評価的・情動的パースペクティブが存している言語表現の層での意味記憶は外的なものにとどまり、エピソード記憶に影響を与えることはない。したがって当時のエピソード記憶と現在の私の視点とのギャップは自由間接話法によって埋められているわけではない、という反論である。

ゴルディはこの反論に対して、確かにそのようにギャップを埋めることができない事例はあると認め、とりわけ別個に扱うべき深刻なケースとして PTSD の例などを挙げている (p.70)。しかし一般に、エピソード記憶においても、そのときの私の視点からしてありえないようなものが見出されることがある。例えば自分が泳いでいる記憶が、上空から見下ろされた光景として浮かび上がる場合や、階段から落ちた記憶が、落ちる自分を脇から見ているような視点で描かれる場合などがある (p.49)。ではそのようなエピソード記憶は、そもそも記憶ですらないまったくの捏造物なのだろうか。

一般に、エピソード記憶の二つのあり方として、当事者として体験する人から、「内側から」見られた当の出来事の記憶としての「視野の記憶 field memory」と、その記憶の一部ではあるがその出来事のいわば第三者的な観察者にとっての、「外部から」の「観察者の記憶 observer memory」とが区別される (ibid.)。ゴルディは観察者の記憶が優勢になる場合として、三つのケースを挙げている (p.50-1)。一つには幼年期や数十年前に住んでいた街での出来事など、遠い昔の記憶のケース。しかし時間的に遠いということだけが要因ではなく、アイロニーの程度差も要因に数えられ、そのギャップが大きいものが第二のケースとして挙げられる。上の昨晚のパーティーの例などはその好例であろう。最後に、これもパーティーの事例に当てはまることであるが、当時感じていなかった感情を現在もつようなケースが挙げられる。

このように、まず第一に、観察者の記憶がいまの私の情動の影響を受けることがある。観察者の記憶はそれ自体エピソード記憶の一つであるが、その視点は私がいまそれを想起する視点に影響を受け、浸透されるのである。また第二に、視野の記憶ですらアイロニーの影響を受ける。私が想起するときの情動が、想起された光景を色づけ、陰影を与える。たとえばある人の第二次世界大戦の開戦の記憶は、開戦を告げるラジオ放送と、そのときふざけてみせた父親の様子を含んでいるが、にもかかわらず深い不吉な前兆の意味を帯びた不安に彩られて想起される。いまこれを想起する人は、第二次世界大戦の悲惨をすでに経験し、そのことが出来事に暗い影を投げかける。こうしていずれにおいてもエピソード記憶は、先の反論のように、現在の想起としての意味記憶に左右されない自立的な内容をもつというよりむしろ、いまの感情が記憶の内容においても

その想起の仕方においても影響を与えるのである。またこのことの延長で、先ほどの、一人称的な経験であるにも関わらず三人称的視点で思い出されるようなエピソード記憶もまた考えることができる。

最後に、このように変容された記憶がそもそも記憶の名に値するか、それはむしろ捏造されたフィクションなのではないかという疑問は当然でてくるだろう。この点についてゴルディは簡潔に触れている (p.53-4)。過去を想起することは、例えば考古学が従事するような発掘の作業のように、隠されたものを見つけ出して復旧することなのか、それともその当時は知られていなかったものを具現化する構築の営みなのか。ここでは一貫して後者の側面が強調されてきたが、ここでゴルディは記憶においてすべてが構築されるわけではないと言う。エピソード記憶がたとえ特殊な場合に誤りで不正確で誤解を与えるものであったとしても、体系的にそうであるなどということ的支持する理由は何もない。構築とは、もともと経験されたエピソードを再組織化し、粉飾し、変質させる仕方を表すものだと言えるが、ここでのポイントは、そうした加工が限定的なものであるということであろう。

2. ナラティブ的自己感（観）

次に、ゴルディによる人格ないし自己についての議論を紹介しよう。ここで彼は「ナラティブ的自己感（観） narrative sense of self」という独特の概念を導入している。この議論は私たちの人生において「自分が変わった」と言いたくなるような場面で、そこで何が起っているのかを形而上学的存在者としての自己を前提することなく捉えることを目指している。議論に入る前に、この narrative sense of self という用語について言えば、ここでゴルディは sense の含意を強調している。それは「ナラティブな思考において、自己自身や他人について考える仕方」(p.118)とされ、物語的自己 narrative self のような存在者があってそれが持続的に同一性を保持することを前提していないので、「ナラティブ的自己についての感覚 sense of narrative self」とは区別される (ibid)。以下ではこのことをその理論の紹介をつうじて具体的に示したい。なおこれを暫定的に「ナラティブ的自己感（観）」⁸と訳したが、以後はNSS という略称を用いる。

2.1. 人格的自己の同一性とは別の問題

一般に人格的自己の同一性について議論されるとき、そこでは形而上学的実体であれ、心理学的な意識の結合であれ、なんらかの存在者が時間的に持続していると考えられ、それが人格あるいは自己と呼ばれる。例えばパーフィットは、「心理学的連続性とは強い連結性の重なり合った鎖があることである。…XとYとが同一の人格であるためには、毎日をもたいて十分に直接的な心理学的連結がなければならない」(Parfit, p.206=288)と述べている。つまるところロックの、人格の同一性とは記憶の束であるという説に遡る、こうした人格の同一性についての議論はここで、人格についての新ロック的説明と呼ばれている。

8 sense には感性的なもの（「感覚」など）と知性的なもの（価値観、道徳など）との双方の含意があるので、sense of self の訳語としては「自己感」と「自己観」いずれも考えられる。

ところでゴルディは自伝的ナラティブの分析において、いまの私とそのときの私というかたちで私の視点を導入していたが、そこで私の持続としての人格的自己の同一性は前提されていなかったことに注意しよう。もともと二つの視点の食い違いは劇的アイロニーとして、演劇における観客と登場人物との区別をもとにして考えられ、それへの類比物としていまの私とそのときの私とのアイロニー的ギャップが導入された。また、両者を架橋する自由間接話法の議論においても、そこでのナレーターと登場人物との同一性はなんら理論的な役割を果たしておらず、ただ時間的距離の開きや情動的なギャップなどの条件によって、当時の記憶といまの視点との融合が起これと言われたが、この融合は時間の間隔をまたいだ架橋であって、通時的な連続性ではない。いずれにしても、そこでの視点がいずれも私のものである場合でさえ、私の通時的同一性は前提されていなかった。しかし他方、だからこそ逆に、新ロック的説明であれ何であれ、人格的自己それ自体としての同一性を主張する議論と、ゴルディの議論は矛盾なしに両立可能である (p.125-6)。たといいまの私とそのときの私との認識的・評価的・情動的ギャップがどれほど大きかろうと、そのことは時間的連続性としての人格的自己の同一性を傷つけることはないだろう。

ではゴルディは何を問題にしたいのだろうか。彼は NSS の明確化のために、シェヒトマンの人格をめぐる議論をとりあげ、詳細な批判的検討を施したのち、持論を展開しているので、シェヒトマンの議論を必要な限りで取り上げよう。彼女もまた、問題にしたいのが従来の人格論とは異なる層にある事象であることを強調する。人格を問題にするさいに、その心理的な性格が物理的なものから独立に定義されるべきだということを主張する議論と、ある人格に属する信念・欲求・性格・価値観などの変化に際し、人格の同一性が根底において存続しているかどうかを問う議論とは区別される (Schechtman 2001, 95-6)。

別のところでは、彼女は人格ナラティブと、自己ナラティブとを区別する。まず人格ナラティブによって、

「ある人が、自分を連続するものとして認識し、過去の行為や経験を自分の権利や責任に対する含意をもつものとみなし、未来を過去や現在にインパクトを受けるものと認識する。当人は過去や未来の行為や経験と深く同一化する必要はなく、それらを気づかい、あるいはそれらに関心を抱く必要もないが、ただそれら行為や経験をある特定の仕方での別の選択肢にとって重要であるものと認識している」 (Schechtman 2007, p.170)

例えば私がスポーツカーを買う自己に同一化する必要は全くないが、スポーツカーのローンにサインをしたならば、私にはそのローンの支払義務が生じ、支払いをしないとすれば私は信用を失う。このように自己よりも弱くまた通常は自己よりも長い持続を構成するものを、シェヒトマンは自己と区別して人格と呼んでいるようである。「このより弱い意味で自分自身の行為や経験と考えているものが、当人の人間的歴史のうちに存在するものの大部分に相当するものでなければならないだろう」 (ibid.)。ゴルディは、自分が自伝的な記憶を論じる中で扱ってきたのはまさにこの人格的ナラティブであると明言する (p.130)。

他方でシェヒトマンは自己ナラティブの概念を、「より強い種類のナラティブ」(Schechtman 2007, p.171)と規定する。「行為や経験が私自身に属するためには、私はそれと同一化し、あるいはそれを気づかい、それに関心をもつ必要がある。…これらの出来事は現在の経験の質をもっとも強い意味で条件づけ、時間をまたいで感情的な連結と同一化をつうじて意識を統一する」(ibid.)。そしてこうした同一化のために必要なものが「感情移入的アクセス」(ibid.)である。

そこで問題は、新ロック主義者たちの人格的自己同一性よりは弱く、しかし人格ナラティブよりは強い意味での、自己ナラティブを支える自己（これは安定した自己 stable self と呼ばれている）が認められるかどうかである。結論を先取りして言えば、ゴルディは後者の安定した自己をその理論的負荷の高さゆえに退けることになる。そこで次に、彼が焦点を当てる、安定した自己の定義的特徴となる、シェヒトマンの「感情移入的アクセス」の概念について見てみよう。

2.2. シェヒトマンの感情移入的アクセス

問題をつかみやすくするために、シェヒトマンはパーフィットが挙げた19世紀ロシアの青年貴族の例を挙げている。彼は社会主義の理想をもっていた反面、自分が遺産として広大な土地を相続することを知る。そこで富裕になった自分が社会主義の理想を失ってしまうことを恐れ、自分の土地を農民たちに与えることを記した法的文書を作成する。この文書を妻の同意なしには撤回できないようにした上で、彼は妻に、もし自分が撤回を求めても拒否するように頼む。もし彼自身が社会主義の理想を失ったならば、もはや彼を彼女の夫と考える必要はない、夫はもう存在しないと考えてくれ、と懇願する、というシナリオである(Parfit 1984=1998, p.327=449)。

この夫が本当に社会主義の理想を失ったとした場合、まず彼は実際に別の人物になったわけではないし、記憶を失ったわけでもない。にもかかわらずそこには、「人格的存続 personal survival のために要求される定義的な特徴の安定性が欠如している」(p.133)と言えるのであれば、その特徴とは記憶だけではない。ここで人格的存続のために不可欠であるにもかかわらず欠けている第二の要素は、社会主義の理想に対する「根本的な共感」だと言える。

シェヒトマンはさらに印象的な例を挙げている(Schechtman 2001, 101,105)。若い時はパーティーの常連で放埒的な生活を送っていた三人の女性がいたとしよう。彼女たちはみな母親となりまたキャリアを重ね、自分の子供たちにも分別を示すべき年齢の母親になった。そこで一人目の「まじめな」女性は、若い頃の生活を忘れたわけではないが、ありありとした現象をともなった記憶としては思い出せず、自分の当時の欲求や情熱からまったく疎遠になり、どうしてそういう振る舞いをしていたのかもはや把握できない。第二の「それほど真面目でない」女性は、内部からの現象的記憶、いわば一人称的なエピソード記憶を保持しており、それに加えて、当時の情熱をまだ覚えており、いま彼女の娘が似た振る舞いをするのに賛同はしないにせよ、よく理解することができる。第三の「苦い思いをもつ」女性は、第二の「それほど真面目でない」女性と同様、自身の若い時のパーティーに明け暮れた日々について、内部からの生き生きした現象的記憶を持っているが、それを羞恥と嫌悪をもって思い出す。

シェヒトマンによれば、上のロシア人貴族の例で問題になったような、人格的存続のための定義的特徴を保持しているのは第二の「それほど真面目でない」女性だけであるという。第一の

女性はそもそもエピソード的記憶をもっておらず、当時のことを自身が体験した出来事として思い出すことができない。また第三の女性は、ロシア人貴族と同じくかつての自分に対する根本的共感を失っている点で、ある根本的な変化をうけていると考えられる。したがって、人格的存続 *personal survival* のために必要なものは、第一に内部からのエピソード記憶、第二に想起される状態に対する根本的共感の二つの要素だと言える。シェヒトマンが「感情移入的アクセス *empathic access*」と呼ぶのは、これら両方の要素を備えた、過去の自分の経験へのアクセスのことである。

2.3. 二重状態モデルと単一状態モデル

次に、シェヒトマンの感情移入的アクセスに対するゴルディの評価を見てみよう。

まずゴルディは一般に感情移入というものが、A に B が感情移入する *B is empathizing with A* という場合、ターゲットとなる A の心的状態とそれに対する反応としての B の心的状態という、二重の状態から構成されることを確認する。この構造は過去の自分に対するシェヒトマンの感情移入的アクセスでも含意されており、例えば上の例で第三の「苦い思いをもつ」女性は、まず過去の自分に関するエピソード記憶をターゲットとなる心的状態としてもち、他方でそれに対する反応として現在の自分が羞恥や嫌悪感をもつという心的状態にある。このようなシェヒトマンの二重状態モデル *two-state model* に対して、ゴルディが提起するのは単一状態モデル *one-state model* である。B の過去はそれに対する B の現在の態度によって色づけられており、自由間接話法によって現在と架橋されている。この場合、過去と現在の二つの状態があるというよりむしろ、両者は相関において分かち難く結びついていると言うほうが実情に近い。

この対比を念頭に置きながら、ゴルディのシェヒトマンに対する批判を見てみよう。ゴルディが最初に強調するのは、安定した自己を想定するさい、それに付随してくる認識論的問題 (p.135f)、つまりそれが成立しているとなぜ言えるのか、どのようにして認識するのか、という問題である。安定した自己、自己ナラティヴを支える自己は、新ロック主義のような強い意味の自己ではないにしても、依然として私が意識するかどうかに依存しないものとして考えられている。じっさい、情動的反応を引き起こす安定した自己の定義的特徴は傾向的特性として性格づけられるが、傾向はまさにそれが顕在化していなくても潜在的に存在すると想定されるものであるから、そこに意識に現れる状態と存在とのギャップが生じることになる。

ゴルディ自身がここで言及している議論であるが (p.136)、カントは自由と道徳法則の関係について、自由は道徳法則の存在根拠 *ratio essendi* であり、道徳法則は自由の認識根拠 *ratio cognoscendi* であると言った。道徳法則があるからこそ自由を認識することができるが、自由はそれ自体としては認識されるものではない。しかしもし自由がなければ、道徳法則は成立しない。これと似たいみで、安定した自己やその定義的特徴と、それが表現されている経験や行為のパターンとの関係を捉えられるかもしれない。一般に、病気とその症状のように、A が B を生じさせ、かつ B によって A が認識させるような関係にある場合に、A があるから B は存在し、B があるから A は認識できる、と断言するように思われる。しかしカントの言うような存在根拠と認識根拠の関係が成り立つためには、B は A の必要十分条件をなすものでなければならない、

さもなければ A の想定は論点先取になるか、あるいは（一つの症状からいくつもの病気の可能性が想定されるように）いくつかの可能な説明のための仮説の一つにすぎなくなるだろう。したがってシェヒトマンの感情移入的アクセスもまた、安定した自己に対して必要十分条件をなすものであることが望ましい。

しかし感情移入的アクセスは、安定した自己の成立のための必要条件にも十分条件にもなっていない (p.137)。前者の構成要素であるエピソード記憶と根本的共感について考えてみよう。まずエピソード記憶について言えば、それと対置される意味論的な記憶には安定した自己を支える力はないのだろうか。例えば往年のロックスターが、すでに長い音楽生活の中で、若い時の放埒の日々をほとんど細部においては思い出せないにも関わらず、「若い時はもっと無茶したものだ…」と意味論的に回顧し、それが彼のアイデンティティを支えているということはある。シェヒトマンはこのような意味論的記憶を軽視しているのではないか。また、エピソード記憶というとき、もっぱら視野の記憶のみが考えられ、ゴルディの言う観察者の記憶が考慮に入れられていないように思われるが、これも不当ではないか。ここでは上司の不当な振る舞いを勇気を出して糾弾したことの想起が、第三者的な視点からの観察者の記憶となって現れるという例が挙げられるが、この例もシェヒトマンの言うような内部からのエピソード記憶ではないにも関わらず、その勇敢さをいささかの誇りをもって思い出す私の人格的存続が成立しているように思われる。上の二つの考察から、エピソード記憶が安定した自己に対する必要条件であることは疑わしい。

また逆に、内部からのエピソード記憶も過去の自分に対する根本的な共感も備えているが、それが安定した自己の存続の条件としては不十分である例もゴルディは挙げている。ある大変思いやりのある男性が、この思いやりを自分の人格の定義的特徴と考えているとする。ところでこの男性は、幼年期はスラム街に住む少年ギャングの冷酷なリーダーで、暴力的な抗争や犯罪などスリルに満ちた生活を送っていた。現在はそうした生活とは縁を切っているが、当時の出来事をいまでもありありと想起することができ、また当時の暴力的行為やスリルに対する根本的共感も失っておらず、実際少年ギャングのドキュメンタリーなどを見ると、彼らの生活を深い共感をもって理解することができる。（この点で彼は上の「それほど真面目でない」女性とよく似た事情にあると言える。）にもかかわらず、彼の人格の定義的特徴はそこにはなく、かつてギャングのリーダーだったときの冷酷さと現在の思いやりとが矛盾するにもかかわらず、感情移入的アクセスは彼の自己を損なっていない。

シェヒトマンの感情移入的アクセスおよび存続する安定した自己の議論に対して、ゴルディは自分の議論はいずれも前提しておらず、したがって過去の思い出から疎遠になったりそれに苦い思いをしたりすることも、同じく自分の過去への関係性で見なされると主張する (p.140)。NSS において問題になっているのはシェヒトマンの言うような安定した自己ではなく、あくまで人格ナラティブが存続している感じ・意味 sense である。結局のところ、シェヒトマンの用語を借りれば人格ナラティブで十分であり、それに付加されるような自己ナラティブは余計である。

しかし逆に、人格ナラティブがもつ重要な側面を、シェヒトマンの自己ナラティブが取り逃がしているように見える点もあり、ゴルディは 4 点を挙げている (p.140-1)。まず第一に、ナラティブにおいて私は「私」という一人称的代名詞を使うが、この使用はシェヒトマンの言うようなエ

ピソード記憶にも共感にも依存しない。「私は2歳の時乳母車から落ちた。私自身は覚えていないけれども。」ということさえ可能である。第二に、字義通りには生と死に関わる自伝的ナラティヴが、シェヒトマンの言う定義的特徴によって決定される人格的存続と混同されないのは当然である。第三に、先のスポーツカーの例もそうであるが、法的・道徳的責任に関して言えば、共感を失って人格的存続が欠けても免責されないのが普通である。第四に、「苦い思いをもつ」第三の女性のように疎遠になったり苦い思いをすることがあっても、存続するという根本的な感じ・意味は損なわれることはない。

ゴルディがこのようにシェヒトマンの議論を退ける理由は、彼女の理論においては安定した自己という理想が重要な役割を果たしており、そのことがとりわけ人格にとって定義的な特徴の喪失による自己の変化を阻んでいるからである。しかし実情はより緩やかでまた束縛のないものであるように思われる。ある面から見れば私は変化しているが、他の面から見れば、人格ナラティヴにおいて私は私である。シェヒトマンの言うような感情移入的アクセスが強いケースと弱まるケースはあるだろうし、情動的評価が変化するケースもあるだろう。しかしそれは根底にある「安定した自己」が変化したことの兆候であると解釈する必要はない。記述において変わらない／変わったということは、その根底にある存在者が存続しているか否かの反映であるわけではない。

まとめ

こうしてゴルディは、情動的・評価的パースペクティヴという概念を導入した上で、情動的な観点からいまの私とそのときの私とのギャップと融合という現象をうまく描き出しており、このことによって私たちが日常的にもつ自分についての物語をきめ細かに分析していると言える。他方でシェヒトマンとの論争においては、人格的自己の形而上学的想定に対しては非常に控えめで、理論的負荷を減らす姿勢が伺われ、これらの点が彼の哲学の理論的美徳であると言える。

なお本稿では紙幅の都合上、彼のナラティヴ哲学において残りの大部分を占めている未来についてのナラティヴの考察に光をあてることはできなかったが、実はむしろこちらの領域に、実践的色合いの強いより複雑で興味深い現象の分析が見出される。その点については別の機会にあらためて論じてみたい。

文献表

- Anscombe, E (1957) *Intention*. Blackwell
 Dodd, J (2016) "Introduction" in: *Art, Mind, and Narrative Theme from the Work of Peter Goldie*. Dodd, J (ed.), Oxford University Press
 Geertz, C (1973) *The Interpretation of Cultures*. Basic Books
 Goldie, P (2012) *The Mess Inside. Narrative, Emotion, and the Mind*. Oxford University Press
 Parfit, D (1984) *Reasons and Persons*. Oxford University Press (訳:『理由と人格』森村進訳、勁草書房、1998)
 Ricœur, P (1984) *Time and Narrative I*. Trans. K. M. Pellegrin. Chicago University Press.
 Schechtman, M (2001) "Empathic Access: The Missing Ingredient in Personal Identity." *Philosophical Explanation* 41: pp.87-105

- (2004) "Personality and Persistence: The Many Faces of Personal Survival" *American Philosophical Quarterly* 41: pp.87-105
- (2007) "Stories, Lives, and Basic Survival: A Refinement and Defence of the Narrative View" in: D. Hutto (ed.), *Narrative and Understanding Persons*. Cambridge University Press, pp.155-78
- Williams, B (2007) *Ethics and the Limits of Philosophy*. Fontana (訳:『生き方について哲学は何が言えるか』森際康友・下川潔訳、1993)
- 信原幸弘 (2017a) 「将来の自分はどれくらい大切か」(『時間・自己・物語』信原幸弘編著、春秋社、p.205-234)
- (2017b) 『情動の哲学入門』勁草書房